

ニュージーランドをヒントに、 北海道の人々に響く アイヌ文化の 伝え方を考える。



立命館慶祥高校IR（インターナショナルリレーションズ）コースでは、「国際社会で活躍する力を養うため、世界で起こっている問題を学ぶ」科目が展開されています。中でもSGH科目である「国際社会」では、地元北海道のアイヌ文化の継承という課題についてグローバルな視点で学びます。特に本年は、東京オリンピックの開会式にアイヌ文化が取り上げられることが決まるなど、国の政策も大きく変わってきています。高校生たちはアイヌの言語を学び、アイヌの世界観を理解することからスタートしました。

「アイヌの研究から世界の少数民族問題まで学びの世界を広げる」この科目の目的は、「グローバルな社会における世界観を持ち、知識を深め発信すること」です。地元の身近な課題であるアイヌ文化との共生について、マオリ族など世界の少数民族問題の取組み方に学びながら、高校生が主体的に考え行動するプロジェクトがどう展開されたか、実際に参加した山口太一先生、江口明子先生、田中さや花さん、細川翔平君の4名に集まってもらいました。

倉石 優勝おめでとうございます。今日はアイヌ文化を通してみなさんが学んだことをうかがいたいのですが、まずはアイヌ文化に関心を持つきっかけについて教えてください。

田中 IR（インターナショナルリレーションズ）コースでアイヌ文化を学ぶのは3年時からだというのを知っていましたが、個人的には『ゴードンカムイ』という漫画を読んで、もともとアイヌ文化に興味を持ち始めていました。この漫画でアイヌ文化の知恵を学び、北海道の歴史もわかりました。

授業では二風谷アイヌ博物館の芸員の関根健司先生がアイヌ語を教

えてくれたのですが、アイヌ語を学ぶ時間が楽しくて言葉も身に付きました。アイヌネイティブの人たちの昔の会話の録音を聞いて、アイヌ語が生きていた言語だったと知った時は感動しました。授業で多くのことを学んでからアイヌ文化の継承地、平取に行つたので、フィールドワークを楽しむことができました。平取の二風谷小では月1回アイヌ語の授業をやっており、平取高校ではアイヌ文化の調査活動が盛んでした。

細川 私は中学校から立命館慶祥に

来ていて、高校入学までにアイヌ文化を学んでいました。中学2年の時の舞踏ワークショップにアイヌネイ

ティブの方が来ていて、アイヌの神話や楽器演奏を聴きました。小学校の時に習った歴史と違い、アイヌ側から北海道の歴史を見るということも学びました。

IRコースのアイヌ文化について学ぶ授業では、多彩なバックグラウンドを持つゲストスピーカーが来てくださって、アイヌ文化についていろいろな考え方があり、カルチャーショックを受けました。

また、私たち男子二人は立命館のプログラムで、江口先生と一緒にニュージーランドの海側のフアカタニ（Whakatane）へ行き、インター



SGH全国高校生フォーラムにて

(向かって左から) 前田色葉さん、田中さや花さん、尾澤峻太さん、細川翔平さん(全員IRコースの3年生)

座談会進行役 | 倉石寛(副センター長)、金井文宏(RITA編集人)



マオリ族の文化を身近に楽しく学ぶニュージーランドの学校。

ミデイエイト(中学校)のマオリ文化の授業を見ました。

田中 SGH運営指導委員長の本田優子先生(札幌大学教授)が、ニュージーランドのマオリ文化の研修へ私たち女子2人を推薦してくれました。学年主任の先生の引率で、オネフェロ地区でマオリ文化のダンスやハカを行うグループである「カパハカグループ」の踊りなどを見ました。自分より小さな子たちがマオリ文化を学んでいるのを見て驚き、北海道に住んでいる自分も、地元の文化であるアイヌ文化を伝えていきたいと思いました。関根先生の授業では、アイヌ語を学ぶことによって生き物やモノを大切にするアイヌの思想も学ぶことができたと感じています。

細川 立命館中学でも3年生の時に2週間のニュージーランド研修があるので、そこではマオリ文化を一つの事例として少し学んだだけでした。でも、今回は5日間、マオリ漬け、というくらいで、本当に多くのことを学ぶことができました。

田中 今回行った学校は、日常生活でマオリ語と英語が混ざっているようなところだったんです。先生は「これを持ってきなさい」という指示を、英語とマオリ語で行います。しかも私はマオリの家庭にホームステイし

たので、本当に「マオリ漬け」という状態。将来、北海道の学校でアイヌ文化やアイヌ語を学ぶことが広まって、アイヌ語と日本語が混じり合うようになると、こんなイメージなのかなと体感できました。

アイヌ文化を学ぶためのカリキュラムの工夫

金井 先生方はどんな考え方でカリキュラムを組み立てられているのでしょうか？

江口 立命館中学校では、「アイヌアートプロジェクト」という民間の団体と一緒に、版画や歌、踊りなどからアイヌ文化に触れていました。ヒストリーに注目するとネガティブな印象が強くなるので、公演やワークショップなどアートからアイヌ文化へ入っていくという活動をしている団体です。

IRでのアイヌの授業は週に1コマ、社会科の教員が担当しています。今年のIRコースの人数は少ないのですが、みんな関心が高かったです。授業では最初に歴史、次いで内閣官房アイヌ総合政策推進室の参事官に来てもらい、国の政策を学びました。その後、北海道博物館の先生にアイヌ文化を語ってもらい、アイヌ語の先生から言語を学びました。アイヌ

の歴史は私たちの負の部分の学びになり、それだけでは乗り越えられないものがあるので、まずはアイヌ文化からアプローチしています。

今年はいヌ語を重点的に学びました。アイヌ語は消滅危機言語で、きちんと喋れる方は5人ほどしかいません。アイヌ語を使える自分が楽しいと思える授業にしたいと、ニュージールランドのマオリ文化の学びを参考に、私たちも歌と踊りでいこうとしました。また、マオリ語だけで学ぶという「テ・アタランギ法」も参考にしていきます。ニュージールランドでは他にも、マオリの歌と踊りの自作自演の作品をスマホアプリで見

られるようにするジャイソン・キング教授（オークランド工科大学）の手法が面白かったですね。

来年は、アイヌ文化の再生に正面から取り組んできた萱野先生の事例を取り上げたいと思っています。

金井 実際に担当されている山口先生は、どのようなことを心がけているのですか？

山口 アイヌ文化の授業は週1回で年間計23時間しかありません。その中で、前半はアイヌについての知識をしっかりとインストールすることを目指しました。自分自身が話を聞きたいと思うような外部の優れた専門家や実践者に学校に来てもらい、子

どもたちがちょっと背伸びをしないといけないようならうことにしたのです。

例えば、内閣官房アイヌ

総合政策室で政策を作っている参事官に

東京から来てもらう、アカデミックには北海道博物館の先生に喋ってもらう、地元のアインのことは江別市の博物館の学芸員に話を聞く。こうした基礎的な学びを経た後、フィールドワークに入り、平取や阿寒湖のアインの人々を訪問してアイヌ文化や文化継承活動について学んでいきます。

その後、ニュージールランドでマオリ文化の継承の現場を訪れたことで、北海道におけるアイヌ文化についてグローバルな視野で考えられるようにしました。そのプロセスと成果を2018年度SGH全国高校生フォーラムで発表したので。

江口 同時に週4コマで1万字論文を仕上げる「課題研究」という授業があり、問題意識を持ち、課題を発



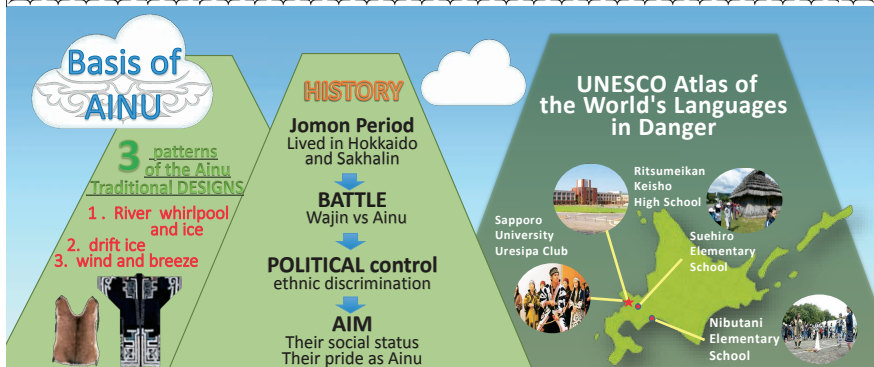
慶祥メディアセンターにあるアイヌコーナー。アイヌ学習の参考となる文献・資料・新聞切り抜きが展示される。

見して、主張をどう組み立てていくかを学んでいます。インタビューのやり方も身に付けて調査し、最後にレポートの作成とプレゼン。こうしたプロセス全体を学んだことも、SGHでの発表にとって大きな力になったように思います。

山口 ただ、この授業はSGHとして学ぶだけではなく、「北海道が抱える課題」としてアイヌについて議論し、世の中に影響を与えられるようになりたいということを目標にしています。私自身、好奇心を持って学ぶ人間なので、高校生たちと一緒に勉強し、彼らとフィールドワークに出かけました。取り組みを始めた5年前には、アイヌの人々の住居（チセ）を訪ね、楽しく勉強させてもらったこともありま



(上) アイヌ研修で訪れた二風谷小学校にて、小学生とアイヌ語のゲームを行う。(下) 平取町立二風谷アイヌ博物館を訪れた2018年度のIRコースメンバー。



Our Actions

- Study in NZ**
 - * SGH study trip *
 - Learn about educational program of the Maori
 - * Indigenous people exchange program *
 - Learn Maori culture
 - Introduce Ainu culture
- In Class**
 - * Guest speakers *
 - * Ainu language class *
- Fieldwork**
 - * Ainu museum *
 - * Nibutani Elementary School *
 - Many Ainu people live there
 - Taking Ainu language classes

Our Proposals

To share the deep spiritual world of the Ainu.

DESIGN



- school uniforms
- wood carving art class

FOOD



- school cafeteria

LIVING



- Ainu language classes
- performance teams

SGH全国高校生フォーラムでは、特にデザインを重視したというポスターが好評だった。

全国大会で優勝できた理由。

金井 今回優勝した文科省のフォーラム(123校参加)では、アイヌ文化の学びをどう生かしたのですか？

江口 今回の発表会では、認知度が低いアイヌのことについて知ってもらうという方針で臨みました。審査する側からは発表方法やリサーチ手法についてサジェッションが来ていましたが、私たちはそれにこだわらず、アイヌのことをまずは知ってもらうためにポスターセッションで

はデザインに力を入れました。デザインで多くの人を惹き付け、高校生たちが学んだ知識や経験からアイヌ文化への理解を広げようとしたのです。私たちの基本的な考え方をアイヌ語で「ainu puri a=eraman」(アイヌに触れてアイヌを知る)と冒頭に

掲げ、最終的にはアイヌの衣食住を知ることにより、アイヌの精神世界も理解してもらうことを目指しました。細川 みんなで話し合って、衣食住について次のような提案をすることにしました。Designでは学校の制服の一部にアイヌの文様を取り入れ、文様自体に文化的な意味があることを知ってもらう。また、美術の時間にアイヌの文様を彫る。

Foodでは、学校の給食で1週間、アイヌ文化に即した食事を味わってもらうこと。「オハウ」と呼ばれる鮭を使った鍋料理や、山菜と油の和えものでポテトサラダのような「ラタンケブ」などをメニューに加え、アイヌが狩猟採集経済であり鮭や山菜などが食材になることを知るので

Livingでは、授業でアイヌ語を学んだり、アイヌのダンスチームを設けることを提案しました。

田中 北海道の子どもたちが小中学校で学ぶアイヌは、シャクシャインの乱など激しい戦いがあったために、「アイヌに対して申し訳ないことをした」という負のイメージがあるんです。だからこそ、身近な衣食住からアイヌ文化を知ってもらい、その奥にアイヌの精神世界があることを紹

介したかった。ニュージーランドでは、マオリなど少数民族の文化を広めるにはどうしたらいいのか、教育の観点からヒントをもらったので、それらをこの大会の提案に活かせればと思ったんです。

江口 ラグビーのニュージーランド代表「オールブラックス」は、試合前に「ハカ」という舞を披露するなど、

マオリ文化が国の文化になっていきます。北海道ではアイヌと聞くとシャットダウンしてしまう人が多い中で、ニュージーランドのような教育普及の手法に学ぶことは有効です。

私たちの手法が思いのほか支持され、ポスターセッションで選ばれた後、最終上位4校まで残れました。他の学校は帰国子女が流暢に英語で

アイヌ文化を 楽しく学ぶためには。

倉石 みなさんは北海道の学校でアイヌ文化をどういう視点から学べばいいと思いますか？

細川 私は小中学校におけるアイヌの学習も、歴史だけでなく、衣食住からも学んだ方がいいと思います。シャクシャインの乱という用語を暗記して終わりというのは残念です。

田中 そうですね。私も歴史でガチガチにやるのではなく、いろいろな考え方がありとわかれることが大切だと思います。ニュージーランドでは、

小学校の時から身近にマオリの文化に触れています。その後、マオリについて知りたい人は言語や文化を深めていけばいいし、学ばなくてもいい。自分が漫画でアイヌ文化と北海道の歴史を学んだように、こういうのが新しいスタイルじゃないかな。

細川 今年の1月にイギリスに行った時に大英博物館で「日本展」をやっていて、北海道のアイヌ文化が大きく紹介されていました。私たちももっとアイヌのことを知った方がいい。4月から京都の立命館大学へ進学しますが、「北海道にはアイヌという文化がある」と伝えていきたいと思っています。

江口 ニュージーランドでは本当に楽しく、教育だとは思っていないようなんです。野外でダンスをしたり、寝っ転がって話し合ったり、そうやってマオリのことを身近にしていける。平取の二風谷小学校関根先生の授業では、アイヌ語で「大きな栗の木の下で」を歌ったり、「フルーツバスケット」のフルーツをアイヌ語にしたり、自然にしゃべれるようにしています。私には日本人という以外に文化的なアイデンティティが何もなく、アイヌの人々が自分たちの文化に誇りを持っている姿を見ると羨ましく感じますね。

山口 今年度は国のアイヌ文化への政策方針が明確になりました。2020年には白老町に国立のアイヌ博物館ができ、東京オリンピックでもアイヌ文化を取り上げるようになっていきます。そうした流れの中で、私たちの取り組みはマスメディアに注目され、北海道新聞などで記事になりました。立命館慶祥のSGHでは「共鳴と創造マインドを育む」という目標を掲げていますが、それを少しは達成できたのかもしれませんが、今後は授業の継続可能性を追求し、IRコースだけでなく、学校全体のカリキュラムとして位置付けていければいいですね。



立命館慶祥高校の教室にて。アイヌ学習を担当する左が江口先生、右が山口先生。

課題研究について語るというスタイルでしたが、立命館慶祥チームは、デザイン重視のポスターとともに、1年間の学びの流れの中で衣食住の提案をするというユニークさが評価されたのだと思います。質疑応答でも慶祥チームは質問に対して4人が協働し合って答えていて、全員のレベルが高いチーム力もアピールできたでしょう。